

# 小児科だより vol.6

## 青アザについて

2017.2.1 発行

こんにちは。いよいよ一年で最も寒い時期となり、インフルエンザが流行しています。インフルエンザも胃腸炎も、一番の予防は、うがいと手洗いです。子供のお手本となるように、大人が進んで感染予防に取り組みましょう。

さて今月の小児科だよりは、『青アザについて』です。乳児健診や小児科外来で相談されることも多いので、今回は当院形成外科の小野澤先生にお話をさせていただきたいと思います。



はじめまして、形成外科の小野澤です。形成外科とは、頭から足先までの体表面が専門の外科です。傷跡やアザなどに、手術やレーザー照射（2017年2月頃より開始予定）を行っております。今回は、小児のアザの中で最も多い「青アザ」についてお話したいと思います。

蒙古斑は生まれた時から、おしりにある「青アザ」で、黄色や黒色人種に多く、わが国でも新生児の100%近くにあると言われております。1~2歳時に濃くなる場合もありますが、5~6歳までに目立たなくなることが多いです。

おしりの周り以外にも「青アザ」がみられることがあり、これを異所性蒙古斑と言います。異所性蒙古斑は蒙古斑に比べ消えにくいと言われておりますが、10歳頃までに多くは目立たなくなります（皮膚が厚くなり、伸びるため）。しかし色の濃いもの、直径3cm以下のものは残りやすいと言われております。現在、最も効果的な治療方法は、レーザー照射です。「青アザ」は、自然消退の可能性が高いため、そのまま様子を見ることが多いのですが、露出部や色が濃いものは、皮膚が薄く照射面積も小さくてすむ幼少期に治療を開始する場合があります。

「アザ」が気になっている方は、お気軽に形成外科外来（小野澤医師：月・水・木の午前中）を受診してください。